

有明海・八代海への汚濁負荷の変遷について

1. 趣旨

有明海、八代海への陸域からの流入負荷量等の算定、過去（昭和40年以降）からの汚濁負荷の変遷について検討した。

2. 算定方法

(1) 流入負荷量

一級河川と塩田川の水質基準点より上流域についてはL-Q式、その他の流域については原単位法

(2) 排出負荷量

原単位法

3. 流入負荷量の算定結果

(1) 有明海

- ・BOD、COD、T-N、T-Pの流入負荷量は昭和50年代に高い傾向が見られるが、その後、減少傾向にある。
- ・昭和55年、平成5年度に高い値を示しているが、これらの年度が豊水年であり、そのために流入負荷量が高くなったものと推測される。
- ・流域別に見ると、筑後川流域からの流入負荷量が最も大きく、概ね全体の2割から3割を占めている。

(2) 八代海

- ・流入負荷量の推移は、有明海とほぼ同じ傾向を示している。
- ・流域別に見ると、球磨川流域からの流入負荷量は全体の1～5割（残りはその他の河川）となっている。

4. 排出負荷量の算定結果

(1) 有明海

- ・発生源別で見ると、BODは生活系（4～5割）と自然系（3～4割）、CODは自然系（6～7割）の割合が高い。
- ・T-Nは産業系の割合が高かったが（昭和50年代は3割程度）、平成10年度以降は1割程度に低下。その一方で畜産系の割合が増加（25%程度）。
- ・T-Pは畜産系の割合が高く、4～6割を占めている。
- ・排出負荷量は、昭和50年代に高い傾向が見られたが、その後、BOD、CODは生活系と産業系、T-N、T-Pは産業系の減少に伴い、減少傾向にある。

(2) 八代海

- ・発生源別の状況、全体的な排出負荷量の推移については、有明海とほぼ同じ傾向が見られる。